

西条キャンパスの野犬による被害増大

—早急な対策が必要—

広大な西条キャンパスに野犬が殖え、早朝や夜間の人の少ないときには、建物周辺に出没し、吠えたり、襲いかかったりと脅威をましている。

これまで事務局西条分室では県の動物愛護センターに

依頼して野犬捕獲

・引渡しを行って

きた。これまでの捕獲は七匹、引渡しは三匹。

当初は動物愛護

センターが直接捕

獲に当たってくれ

ていたが、餌をや

ったりしていた一

部の学生が「かわ

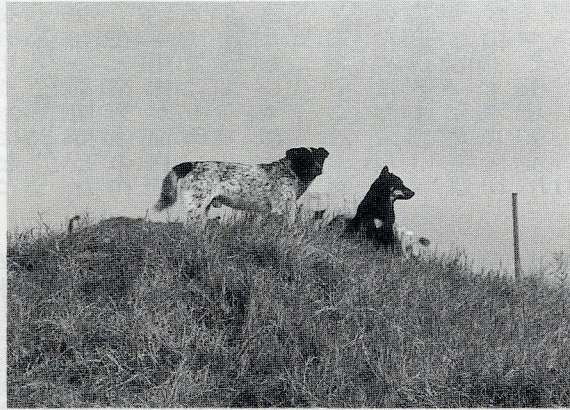
いそうだ」と実力で捕獲に抵抗したため、同センターは介入を断念。い

までは分室が細々と対策を行っている。

この間に野犬は捕獲器や麻酔銃に対する知恵をつけ、容易に捕獲できない状態になってしまった。

特に危険なのは、山中池からぶどう

池に注ぐ小川に沿った林のなかに、日



高台の上からあたりを物色する野犬

中は潜んでいる五、六頭の群れで、東北に一キロ離れた附属幼稚園の兎小屋が襲われたり、西南に一キロ離れた西第二福利会館（生協の食堂がある）の付近で人を威嚇したりしている。

夜間、自動販売

機に食糧を買いに

行った学生が襲わ

れたり、事態は

人命にもかかわり

かねない状況にな

っている。

野犬は人間に吠

えついたり、噛ん

だりする直接の危

害以外に、狂犬病、

破傷風、糸虫症な

どの人体感染症を

媒介することがあ

り、またノミやダ

ニをたいていもつ

ている。さらにファイリア、デイス

ンパーなどの疾患を飼犬に感染させる

危険性もある。

目先の感情にはしつた結果、西条地

区の学生は文字どおり「飼犬に手を噛

まれる」事態に直面している。

大教センターの「卒業生からみた広島大学の教育」報告書とまる

—減少する教員就職者、理・工に高い大学院進学率—

平成四年の学内科研で行われた大学教育研究センターの「卒業生からみた広島大学の教育」の中間報告書がまとまり、九月十四日、評議会終了後にセンターの金子元久助教授により発表会が行われた。教員の出席者はわずか十三人。「教育成果の調査結果を発表するというのにこんなに出席者が少ないのが、まず問題」というある部局長の発言も。

調査は医・歯学部、法・経二部を除く、七八、八〇、八三、九二年の広大卒業生約二万五千人の名簿から三〇％を無作為に選び、アンケートで就業状況、大学教育に対する評価、サークル活動の評価などを調べた。回収率は四三％。報告書は中間報告書、単純集計表、自由記入欄に書かれた卒業生の意見の三巻構成になっている。

報告によると教員に就職する学生は八二年前に比べ急激に減少しており、九二年卒業生の場合、教育五九％、学教七〇％、文十一％、理四％となっている。他方大学院進学者は工で六〇％、理四七％と急速に増加しつつある。

卒業生が職業上で一番必要と感じたものは、第一が専門知識よりも、対人関係能力や説得能力。第二が理論的・体系的な考え方となっている。また教育学系学部では就職案内情報が不足していることに対する不満が強い。

本年度の学内科研、予算枠の二〇％を若手研究者（三十七歳以下）に配分の予定

教育研究学内特別経費（いわゆる学内科研）は、本年度から総額の二〇％を三十七

歳以下の若手研究者を対象に配分する方針がこのほど決まった。一件百二十万円程度が予定されている。なお文部省の科研と同じテーマはだめ、採択方法、結果公表などの基準は従来どおり。事務局への申請締切は十月十三日。

大学構内の盗難多発、移転促進で東千田地区ゴーストタウン化の恐れも

西条キャンパス、東千田キャンパス、東雲キャンパスで空き巣による盗難が多発している。手口からみて同一犯人が西条と広島島の両方を荒している可能性もある。移転が進むにつれて法・経済学部周辺の建物は無人となり、ゴーストタウン化の恐れも出てくるので、建物管理の徹底がますます重要になるとみられる。

学長イタリアへ出張

原田学長は九月二十三日から三十日まで、パピア大学での学術交流の打ち合わせとレントでの「第一回ヨーロッパ頭蓋底外科学会」出席のため、イタリアに出張した。

オーストラリア学長協会の訪日調査団、
広大を訪問

ジョン・スカット、オーストラリア学長協会国際交流部長を団長とする訪日調査団の一行九名が十月二十七日広大を訪問し、本学の教育・研究事情を視察する。